

財団だより

多摩川

1995. 3 第65号



ドジョウ (ドジョウ科)
多摩川の中、下流域に広く分布。
泥底に住む。



世田谷区鎌田地区の多摩川で行われたどんど焼きの風景 (平成7年1月15日撮)

■多摩川現風景■

(21) どんど焼き

「どんど焼き」は、小正月の14日の夜から15日の朝に行われる野外で大焚火をする火祭りのことである。この起源は定かではないが、関東では村の入口を守る道祖神（塞の神）の祭りとして、どんど焼きやサイト焼きと呼ばれる。古くから村人の健康やその年の豊凶を占う大切な行事として伝えられてきた。

写真に示したどんど焼きは、世田谷区鎌田地区の多摩川原で行われているもので、この由来は新しく、動機も現代的である。まず、昭和50年頃、暮や正月に川原の枯草がいたずらや不注意で火災を起こすことが多くなり、いっそ住民で野焼きをして事故のないようにしようということで、鎌田南睦会という町内会を中心に始められた。しかし、人手不足という事もあって、平成4年を最後に野焼きを中止し、草刈りを行ってきた。

平成2年からは、かって田んぼで行っていたどんど焼きを川原で行うようになり、あわせて、凧上げ、もち焼き、トン汁など新しいメニューを加

え、すっかり地元の正月のイベントとして定着してきた。

多摩川の川原では、毎年1月15日の休日に各地でどんど焼きが行われている。その経過は地元によって異なるが、伝統行事として田んぼで行われていたものが、川原へ引っ越したり、新たに復活したりとさまざまである。

●関連する財団の助成研究 (Noは報告書番号) <学術研究>

- ① 多摩川水系のアメニティ構造解析に関する研究
1981年 杉尾伸太郎(株)プレック研究所 (No.34)
- ② 武蔵玉川における生活環境に関する地誌学的研究
1988年 玉井建三 聖カタリナ女子大学 (No.98)
- ③ 住民のための多摩川環境情報の利用提供システムの研究
1993年 生田 茂 都立大学 (No.151)
- ④ 近世多摩川流域の史的研究
1993年 多仁照廣 敦賀女子短期大学 (No.150)
- ⑤ 多摩川における河川敷利用の変遷について
1994年 三井嘉都夫 法政大学 (No.159)

<一般研究>

- ① 絵画にあらわれた河川景観の変遷—多摩川を主として—
1994年 岡村直樹 フリーライター (No.84)

*訂正 前号の「多摩川現風景」カワラノギクの保護の記述の中で「カワラノギクは別名ヤマジノギクと呼ばれ…」と記載しましたが別名ではなく、近縁種との指摘がありましたので訂正します。

多摩川散歩

■ 平瀬川環境マップ ■

うるおいのあるまちづくり
地域問題促進委員会 松井 隆一

「昔から地域住民と密着した平瀬川を、これからも心のよりどころになるような川にしてもらいたいために」という表題で平成5年12月に川崎市に陳情書を提出しました。多摩川の支流全長約10km弱の平瀬川は、向丘地区内の種原から蔵敷-初山-神木-上作-二子玉川へと注いでおりますが、太古の昔より農作物をうるおわせ、この向丘に住む人にとって大切な川でした。この地区の都市化により、田園がなくなり大雨時の排水路としてのみ活用されることを目的として、河川改修がこの30年間進んできましたが、なんとも殺伐とした川に変化しております。我々が子どもの頃は、泳いだり、魚釣りや魚とり等水遊びをして多くの体験をしてきました。環境問題が地球規模で考えられる今日、我々の身近なこの川も、環境資源としてもっと大切に出来るはず、と地域諸団体が丸となって「川を生かしたまちづくり」の推進を始めました。その一環として、平瀬川環境マップづくりを考えました。

広く平瀬川流域の方々に地域の自然や文化史跡を知ってもらいたい、歩いてもらいたい。とマップづくりが平成6年3月から始まりました。幸い地元小学校6校の校長先生からも協力したいとの要請があり、月2～3回の現地調査や編集会議をもって、8月下旬に10,000枚を刷り上げることができました。9月11日にマップを使ったウォークラリーとマップ贈呈式を開催（参加大人100人、子ども200人）し、地元小学校全生徒及び各種団体へ5,000枚贈呈することができました。

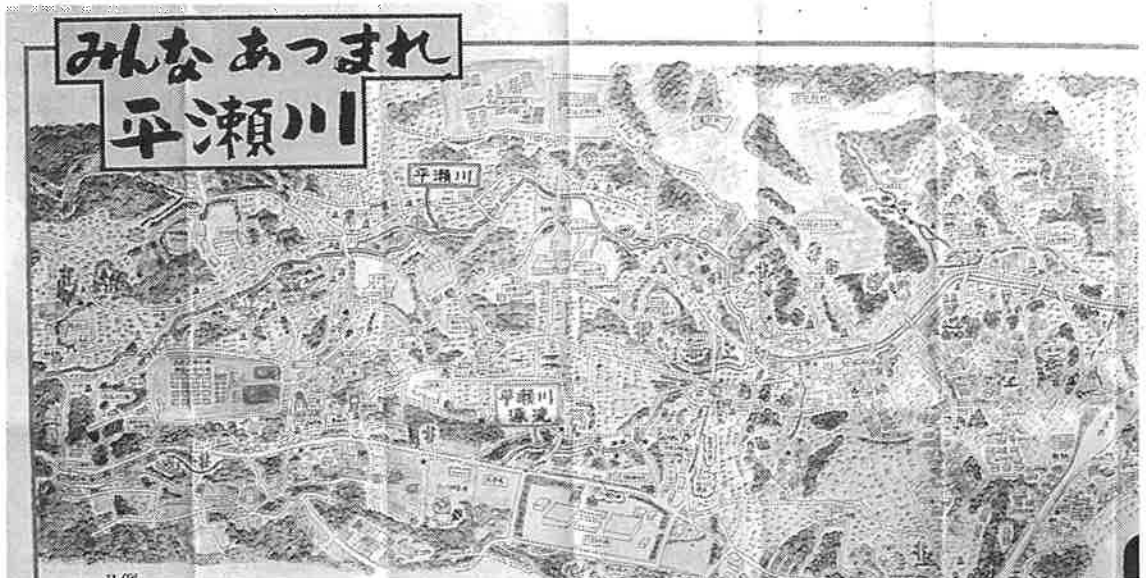
この他に河川改修が済んだ地域でも、川辺や周辺の緑や樹木・通路について、もっと自然を取り込んだ四季の自然を楽しめる平瀬川になり、流域地区のコミュニケーションの場になるふる里の川に、皆でしたいと思っています。

ふる里の川としてどう復活できるか、毎年バードウォッチングや自然観察会をやって、5年、10年変わっていく平瀬川を楽しんでみたいと考えています。

※ご希望の方は、

川崎市宮前区菅生3-1-3 松井 隆一
(TEL 044-976-2600)

までハガキか電話でご連絡ください。



「みんなあつまれ平瀬川」マップ(部分)

私と多摩川



小作でのカヌースクール('94、5撮)

日本レクリエーション・
カヌー連盟 高野典子

私たちがカヌー（カヤック）を漕いでいる所は主に多摩川でも上流と言われている川幅が狭く、岩や落ち込み（小さな滝）の多い流れの急な御岳渓谷から、約18km下流の取水口のある小作の堰までです。

川に沿ってJRの青梅線が通り、御岳駅近くになると車窓からの景色も一変して緑濃い山々が迫り、眼下には細く蛇行した光る川と岩を嵌む白い波が見え、そこには色とりどりのカヌーが、水すましのようにならんでいます。

ここ御岳渓谷は、カヌーイストにとって、正に珠玉のようなゲレンデといえます。カヌー仲間の一人が、自然の美しさで有名なカナダにカヌーツアーに行き、景色のあまりの大味さに帰国してから「御岳の川は最高」と多摩川の素晴らしさを再認識していました。

レクリエーションカヌー連盟では、この辺は中・上級クラスの人で、初心者スクールは岩場のない小作の多摩川橋付近で練習をしています。最近では上流の御岳渓谷でも人家が多くなり、白い泡が立つ水が流れ込むようになりました。私が初めてカヌーに乗った23年前には、河原で皆と焚き火を囲み、川の水でコーヒーを沸かしたこともありました。その頃は、講習生の数よりコーチの方

が多いような時代でしたが、今ではカヌーは誰にでも出来るスポーツと認識され、現に生徒さんの半数は女性です。年齢層も大変広く子供さんから老人まで楽しんでおり、また川を友とするスポーツは自然を大切にすることを教わられます。

しかしアウトドアの遊びには、自然の厳しさと絶えず向い合わねばなりません。必ずとっていい程毎年来る大雨や台風で川は一瞬にして濁流に変貌し、人々に様々な被害を与えます。小河内ダムの大量放水により、青梅市内はまるで空襲警報のような大きなサイレンと拡声器が駆けめぐり、普段は川の音などしない我が家でも夜になると「ゴー」と無気味な水音が聞こえ、刻々と水高が上がって来ます。濁流に傷め付けられている川を考えると胸が締め付けられるような思いでまんじりともできません。夜が明けると川は真茶色の濁流が、大きな木やらゴミ・石を巻き込み凄まじい勢いで川幅一杯に流れ、見なれた広い河原や岩陰は一つも見えませんが、一台風毎に繊細な上流の川は大量の土砂が押し流されて川底は勿論、川そのものの形も変わってしまいます。しかし有難いことに、2、3ヶ月もするとまた元の美しい多摩川の流れに戻ってくれます。高い木の枝に、ビニールの断片が、無数引っかかっているのだけが恐ろしい増水の名残のようです。

小作の堰の初心者スクールも、年々土砂の堆積により流れが変わり、以前より少々難しいゲレンデになってしまいました。けれど水質は、18km流れる間に石や砂の力で浄化され、上流の御岳よりも更に綺麗に澄み、自然の力の偉大さをつくづく感じました。

この美しい多摩川で、カヌースクールを開催できるのもまた川周辺の人々の協力があるからだと思います。奥多摩漁業組合。大きなカヌー本体の置場所を提供して下さる地元の人々。皆様の親切を心より感謝しています。

これからも、自然の力には謙虚に、四季折々の魅力ある大好きな多摩川で、楽しくカヌーを漕げることを願っています。

よみがえ

甦れ！多摩川

■ 緑川を歩く ■

働とうきゅう環境浄化財団 山 道 省 三
客員研究員

緑川は立川市を流れる川である。川というより、昭和26年に、地元立川市民の強い要望で開削された、いわば雨水排水路である。従って現在では下水道の管轄であり、立川の中心市街地の開発、再開発の中でその大部分は暗渠になってしまった。

この緑川に出会ったのは、昨年(2022年)の6月、国立市を流れる矢川の源流を歩いている時であった。矢川は湧水で知られる川だが、その源流部でこの緑川と立体交差をする。つまり緑川の河床の下を横断しているのだが、その時、一体この天井川とも思える全く水のない川は何だろうと疑問に思ったのだ。

立川駅開設100周年記念として発行された「立川駅百年」(立川駅開設100周年記念イベント実行委員会発行、平成元年4月)を、その責任編集者である三田鶴吉さんからいただいて読んでいた中に、緑川の記述と写真があった。そこに記されている要点を整理すると、立川駅はもともと武蔵野の家一軒も見当たらない桑畑の中に造られた駅だったが、立川飛行場(大正11年完成)が駅の北側にできてから、少しの雨でも浸水被害が出るようになり、排水路建設の建議、陳情を行ってきたものが、20年以上もたって昭和19年に素堀水路が完成する。そして、昭和28年から現在の開渠部の姿への改修が始まっている。

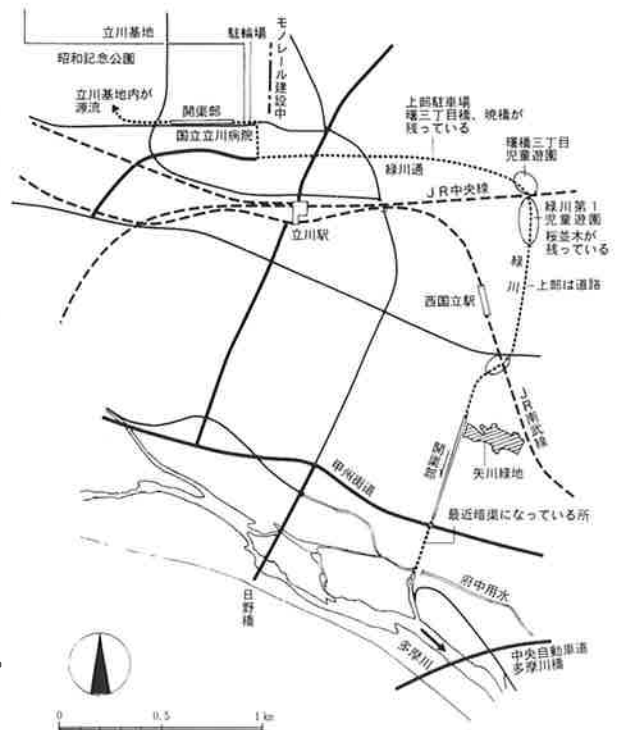
下図に示した緑川は、最上流部が飛行場内にあり、国が管理しているが、国立立川病院北側に一部開渠部があり、そこから下流を立川市の下水道部局が管理している。

まさに人工の排水路と思われるのは、その流路が直線的であり、水路の断面も単純な点であろう。そして、上流のほんの一部と下流部の約500mを除いて全て暗渠で、上部は、道路、駐輪、駐車場、児童遊園になっている。それでも辿って歩い

ていると緑川の痕跡に触れることがある。たとえば、立川駅北口には「緑川通り」と呼ばれる大通りがあり、「曙三丁目橋」「暁橋」の石の欄干が残り、昭和29年竣工の橋銘板が見える。またJR中央線の交差部は緑川児童遊園であり、かつて水路の兩岸に植えられていた桜の古並木がその名残りをとどめている。

そして、下流部の開渠部である矢川緑地保全地域から甲州街道に至る約500mは段丘崖の下に広がる農地や樹林地の武蔵野を思わせる風景の中をまっすぐ多摩川に向け流下している。この水路も近々全て暗渠にし道路となる予定である。すでに河口部はその工事が進行している。人が造った排水路とは言え、立川の発展に寄与した重要な土木遺産でもある。普段は水の流れない川でも、立川の立川たる風景が道路が変わることで、間もなく全ての住民の記憶から忘れ去られようとしている。

案内図



財団からのお知らせ

＜研究助成報告書完成＞

助成集報（21巻・22巻）並びに多摩川環境調査助成集（第15巻）が完成しました。

助成集報

研 究 課 題	代表研究者	所 属
＜第21巻＞ ●多摩川河口域における悪臭発生機構に関する基礎研究 -特に底泥における硫黄起源の悪臭物質について- ●多摩川中流域における流域環境の評価と将来予測に関する調査研究 ●多摩川流域およびその周辺地域における降雨分布の微細構造の気候学的研究 ●武蔵野台地の段丘崖に分布する著名湧水の湧出機構の解明とその保全、ならびに環境モニターとしての機能の検討 ●近世多摩川流域の史的研究 ●住民のための多摩川環境情報の利用提供システムの研究 ●衛生データと地理情報システムを用いた多摩川流域およびその周辺における鳥類繁殖分布状態の変化と環境変動との相互関係解析 ●多摩川流域に生息する野性ニホンザルの生息実態調査 ●多摩川水系における有機金属化合物の化学形態及び濃度分布とその生成機構に関する研究 ●多摩川流域の田園景観に関する研究 -国内外の実例分析を通じ、これからの都市環境づくりをめざして- ●多摩川上流域における自然林および人工林の土壤動物群集の構成と季節変化	高野 穆一郎 武内 和彦 西沢 利栄 新藤 静夫 多仁 照廣 生田 茂 金井 裕 和 秀雄 田中 茂 進 士 五十八 田村 浩志 北村 眞一	東京大学教養学部助教授 東京大学農学部助教授 東京成徳大学人文学部教授 千葉大学理学部教授 教賀女子短期大学 日本史学科教授 東京都立大学教養部教授 財団法人野鳥の会研究 センター主任研究員 日本獣医畜産大学教授 慶応義塾大学理工学部助教授 東京農業大学農学部教授 茨城大学理学部教授 山梨大学工学部 土木環境工学科助教授
＜第22巻＞ ●多摩川の音を測る	北村 眞一	山梨大学工学部 土木環境工学科助教授

多摩川環境調査助成集第15巻

研 究 課 題	代表研究者	所 属
●多摩川河川敷に発生する陸生ユスリカの研究	小林 貞	カリタス女子高校教授
●河川敷利用形態の違いが与える多摩川（下流域）の自然環境への影響	島池 美帆	多摩川環境調査会
●多摩川流域における魚食性鳥類の分布、及び摂餌習性の映像分析による調査・研究	柚本 修	映像プロデューサー

寄贈文献の紹介

●「切り絵 利根川の旅」

後藤伸行・岡村直樹 著 1994年(株)オリジン社発行
 利根川流域の名所、旧跡等本流50ヶ所支流30ヶ所を著者等が踏査し、切り絵を後藤氏が、文を岡村氏が分担し、各地の歴史的背景や四季の特色を紹介している。また各地へのアクセス、問い合わせ等のガイドが付いている。

●「人・くらし・生命が変わる EM環境革命」

比嘉照夫 監修 1994年 総合ユニコム(株)発行
 EMとはEffective (有用な、有効な) Micro-organisms (微生物) の略語で、この技術を農業分野、生ごみ処理・リサイクル、水質浄化等に適用した先進事例74ヶ所を紹介し、EMの有効性と技術手法を解説している。

多摩ルネッサンスシンポジウムに参加して

多摩ルネッサンスシンポジウムが今年も行われた。1984年から毎年行われ、今回は第11回である。多摩川流域の大学を中心として多摩地域の科学技術の振興のためのルネッサンス活動である。

現在多摩川流域には70を超す大学が集中しており、日本における代表的な学園都市を形成している。

今回の全体テーマは、「都市環境と人間の調和」である。11月19日、八王子市の南大沢にある東京都立大学のキャンパスで行われた。43haという自然に恵まれた広大な敷地にある同大学はすばらしい環境にある。まことに今回のテーマにふさわしい会場である。

プログラムは秋山穰会長の挨拶に始まり、東京大学の吉川弘之総長、評論家依萌子さん、東京都立大学の山住正己総長による基調講演とパネルディスカッションが行われた。

いつでも思うのであるが、チラシにのっている演題と発言の内容は世間的に偉い人になればなるほどまったく異なることである。これはけっして悪いことではなく、主催者側が決めた演題に無理に詰め込むよりはよっぽど良いと思うし、自然ななりゆきで結構なことではなからうか。

特に印象に残ったのは、吉川総長の茶碗の発生についてのきわめて学問的な論理の展開があり、その着想に依さんが新鮮な驚きで感嘆しておられたことである。それほどに大学を代表とする学問的世界が一般社会といい意味で隔絶しているかが伺われて面白かった。午後になって、分科会で五つのセッションが行われ、それぞれ科学技術、環境、国際といったテーマで講演、ディスカッショ

ンが行われた。当財団でも芳村がコーディネーターとして「都市の発展と環境」のセッションでいくつかの切り口から、多摩川流域の環境問題への取組について論じあった。

最初に、四人のパネリストがそれぞれのテーマで基調スピーチを行った。

日野市の水路清流課の笹木延吉氏は「河川の再生と実践」について、日野市の向島用水の親水路整備計画を具体例とする農業用水から環境用水への変革を語った。

日本総合研究所の筒見憲三氏は「エネルギーコミュニティづくり」で環境共生型のまちづくりを提唱し、基本コンセプトをリーストリソース（資源の最小化）におくエネルギー自律型コミュニティの実現を目標とすることを述べた。

東京都環境保全局の木田修氏は「都市化に対応する緑の保全と再生」について、緑に対する認識の変遷をここ20年間について三つの節目でとらえ、現在は量から質への段階にあり、自然を都市との対立概念でとらえず、包含される内容で考えるべきであると主張した。

クリーンアップ全国事務局の小島あずさ氏は「ゴミ問題と市民意識」のテーマで、市民によるクリーン作戦の活動のなかから、ゴミを拾うと同時にデータ調査を行うことにより根本的改善の緒をさがしたいとのことであった。

パネリスト間での議論の交換があり、最後に東京農工大の福嶋先生のまとめで、現場の第一線を代表する方々の貴重な経験を総括してこのセッションを終えた。

芳村重徳

- ・発行日 平成7年3月1日
- ・編集兼発行 (財)とうきゅう環境浄化財団
〒150 渋谷区渋谷1-16-14
(渋谷地下鉄ビル内)
TEL (03)3400-9142
FAX (03)3400-9141



*印刷所 雄文社 〒336 浦和市常盤9-11-1 TEL(048)831-8125